7.寝床の歴史:民家にみる就寝空間と寝床

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9576

7. 寝 床 の 歴 史

－民家にみる就寝空間と寝床－

京都府立大学　町 田 玲 子
滋賀女子短期大学　木 谷 康 子

繊維製品消費科学 Vol. 37 No. 3　別刷
社団法人　日本繊維製品消費科学会

7. 寝床の歴史

－民家にみる就寝空間と寝床－

京都府立大学 町田玲子
滋賀女子短期大学 木谷康子

1．はじめに

「寝床」という言葉から私たちがイメージするのは，木綿の綿を詰めた掛け蒲団と敷き蒲団の組合せではないでしょうか．

木綿の伝来は，戦国時代末で，綿花の栽培は三河の国から始まり，現在私たちが使っているような「側も中身も木綿の蒲団が普及するのは江戸中期から」[1]といわれています．しかし，三河木綿の産地でも貧しい農家は大半，明治中期まで夜間蓑を着て寝ていた[2]ということですし，また，瀬川清子によると，木綿の伝来以後「國の隅々まで，島根縣の北濱村の老人たちまでが綿の蒲團をつくるようになるまでには，少くとも三世紀を費やし」[3]たということで，木綿の蒲団が一般的になったのは日本の「寝床」の歴史のなかでは比較的新しいことなのです．

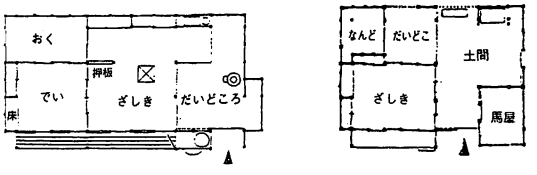
それでは，綿が普及する以前の日本人の寝床とは，どのようなものだったのでしょうか．ここでは，民俗学の領域の資料を中心に，おもに民家の就寝空間や寝床，寝方について述べたいと思います．

2．寝室の呼称

現代の日本の住まいは，不動産の広告でよく目にするように，2LDK，3DKといった表現でしめされます．2LDKといえば，居間（リビング）兼食事室（ダイニング）兼台所（キッチン）とあと2部屋（個室＝寝室）の住居であるということですが，この表現は1950年代後半から一般的になったものです[4]．それに対して従来の民家では，個室は存在せず，それぞれの居室には，団欒，接客，就寝等の家族員に共通する特定の機能があり，呼称が付けられていました．そして，この用途や呼称は，資料1の例に示すように地方色が濃く，地域が異なれば同じ呼称の室でも平面構成上の位置や用途が異なったり，反対に同じ用途の室でも地域によって呼称が異なっていました．

『日本民家語彙集解』[5]より，「寝室の呼称」とされている語彙を拾いあげてみますと，のべ270ほど集めることが出来ます．平均すると1都道府県あたり6つ近い呼称が存在するということになりますが，青森県には24，福島県には23と多く，逆に静岡，三重，広島，熊本，沖縄の各県は1つというように，非常にばらつきがあります．

複数の就寝空間がある地域では，主人夫婦の寝室，若夫婦の寝室，老人の寝室といったように，その室の就寝者による呼称の区別もあったようです．たとえば，新潟県西頸城郡地方には，



旧 宮崎家（東京都）
ざしき：日常生活の中心になる室
おく　：寝室
でい　：客間

菊家家（奈良県）
だいどこ：日常生活の場
なんど　：寝室
ざしき　：客間

資料1　民家の室の呼称と用途の相違の例
（表現研究所編『日本の民家』小学館より作成）

 0037-2072/96/0300-0108 $ 01.00/0 © 1996 Jpn. Res. Assn. Text. End-Uses.

タカ，チウダ，ワリヤという３つの呼称が存在し，タカは若夫婦の寝室，ワリヤは主人夫婦の寝室とされていました．

多くの地域で使われていた名称は，ヘヤ(21府県)，ナンド(25府県)，ネドコ，ネマなどです．

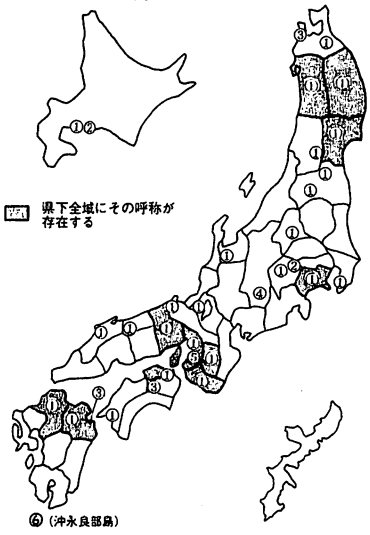
ナンドという室呼称は全国的に存在するのですが，寝室としての呼称の分布と平面構成上の位置を，資料２のように図示してみました[6]．同じ呼称が北と南の離れた地域に存在すること，平面構成上の位置についても，近いから同じで遠く離れているから異なる，とはいえないことがわかります．

さまざまな呼称は，室の機能や構造から名付けられたと考えられるものおよび，寝殿造や書院造などの支配階級の邸宅の就寝空間に関する名称が伝わったと考えられるものがあります．

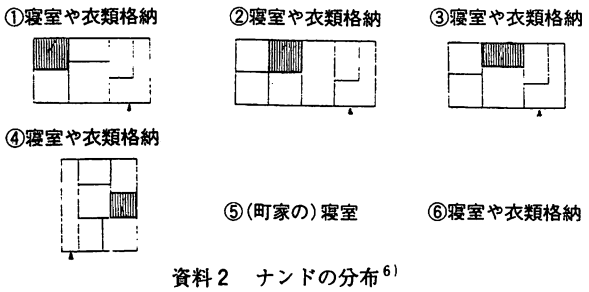
ネドコ，ネマ，ネベヤ，ネドコロなどは「寝るところ」という意味の呼称でしょう．また，カズキは夜着を「被く(かずく)」という語がもとである[7]とされています．青森県弘前市付近では若夫婦の寝室をイボ，イボコ，エボ，エボコと呼び，「疣(いぼ)こ」の意と解説されています[8]が，資料３のように疣のように突き出した平面になっていて，ここからこの呼称が出来たことが伺えます．オクナンド(和歌山，広島，福岡)，オクノネマ(滋賀)は就寝空間が下手(しもて)にもうひとつ並んでいる場合の呼称です．ナンド，チョウダイは後者の例としてあげることが出来ます．ナンドは，納戸のことで，古くは納殿(おさめどの)といい，貴族の邸宅にあって衣類・調度類を納め置く室のことでしたが，やがて寝室と同義に使われるようになったのが，民家にも伝わったということです[9]．チョウダイは，帳台のことで，寝殿造の宮殿内に敷設する調度の一つで，貴族の寝所としての名称が民家の就寝空間に使われるようになったものです[10]．

民家の就寝空間は，主寝室として使われていた地域と，家族全員の就寝空間として使われていた地域があり，前者の場合他の家族員は，居間や接客空間に別れて就寝していたということです．また，閉鎖的で独立した専用の就寝空間をもたない民家が，温暖な四国山地や九州など西日本から南西諸島など南日本に分布しており，このような民家では就寝には枕屏風などを使って，居間や客室を用いていたそうです[11]．

〈ナンドという呼称の分布〉



〈ナンドの機能と平面構成上の位置〉

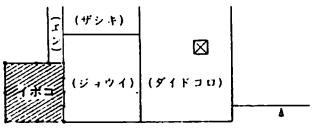


資料２　ナンドの分布[6]

３．蚕の寝床

それでは，この就寝空間で，どのようにして寝ていたのかみていきましょう．快い睡眠ということを考える場合，夏の暑さより冬の寒さのほうが耐えがたいものがあると思います．綿の蒲団が一般的でなかった時代に冬の寒さをどのように凌いでいたのでしょうか．

『北越雪譜』には，かますに入っていろりのまわりで家族全員が寝ている図(資料４参照)があり，「秋山の人はすべて冬も着(きの)るまゝにて臥(ふ)す，



資料３　イボコ



資料4　かますに入って寝ている図
（鈴木牧之『北越雪譜』岩波書店P.105より）

稲わら布団の
感触懐かしく…

新潟・上越市
荒岩　政治
（無職　64歳）

本紙十日付「布のいのち」の記事が、五十数年前のホロ苦くも楽しい思い出を呼び起こした。

一・二反の小作農家、兄三人、妹五人の子だくさんの家庭に育ち、米作農家でありながら、夏場には飯米が底をつき、秋の収穫ときまで借米という貧乏のどん底だった。

そんな苦しみのなかで、秋の取り入れのくるのを楽しみに待っていた。

貧乏所帯で、敷き布団は年中うすいせんべい布団一枚きり。冬の寒さに備えて、母は端ギレを縫い合わせて敷き布団の皮をつくり、取り入れの終わった稲わらをすぐる。

そのくずわらを敷き布団いっぱいにつめる。約二十～三十㌢の厚さになるだろうか。

その上に寝ころんだときの感触は、綿の固まった固い布団にないなんともいえない温かいぬくもりがある。

ブーンと鼻をつく稲わらのにおい、ふかふかして体がしずみ、バネの効いた寝台のようである。

貧しくとも苦しくとも、しぶとく生きる農民が生みだした生活の知恵だろうか。

幼きころ、このわら布団はいかなる羽毛布団にも代え難いうれしさであり、楽しいものであった。

資料5　（赤旗1989年2月16日付投書より）

岩手県二戸郡田山村の寝具
蒲団使用種類別戸数表　（調査戸数145戸）

種類別 / 戸数	藁床と					藁蒲団	ゆぶすま	綿蒲団	藁蒲団	綿蒲団	合計
	ゆぶすま	藁蒲団	ゆぶすま	綿蒲団	藁蒲団	綿蒲団	小計						
戸数	17	15	62	20	114	3	10	18	14				
率 %	11.7	10.3	42.8	13.8	78.6	2.1	6.9	12.4	100				

資料6　岩手県二戸郡田山村の寝具
（瀬川清子『きもの』未来社P.124より）

嘗て夜具といふものなし．冬は終夜炉中に大火をたき，その傍に眠る．甚寒にいたれば他所より稿をもとめて作りおきたる褄に入りて眠る．妻あるものはかますをひろく作りて夫婦一ツかますに寐る．」[12] と書かれています．この村では，夜具をもつ家は2軒だけで，しかも麻の代わりに使っていた“いら”という草で側を織り，いらのくずを詰めたものを客用として持っていたとしています．

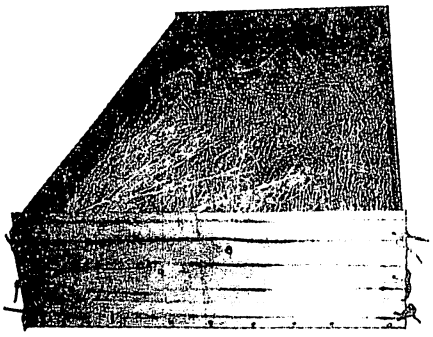
他の地方でも，「麻の苧屑やゼンマイ綿・蒲の穂・柳の絮・茅花・鶏の羽根，海近いところでは海藻をいれた」り，「麻布を幾枚も重ねて刺した」り，養蚕の盛んな地域では「繭の外側のぼやぼやした糸屑（チリボ）が多くたまったのを石の上で木槌で長いあいだ叩いて綿状にして，家の長老夫婦の掛布団に用いた」り，「木綿のわたが豊富に出まわるまで，庶民はきれを何枚も重ねて刺しつけた刺子の着物を着て働き，夜もそれを着て眠った」[13] のでした．

そして，蒲団のない時代，いろりのある地方ではたいてい，いろりの火で体をしっかり温めてから着ていたものを被って寝るとか，もっと寒くなるといろりのまわりで背中を炙りながら寝る（この場合起きて火の番をする人が必要）[14~16] という方法がとられたようです．

少し時代が下り，昭和初期の農村地帯では，蒲団も使われていたようですが，寒さに対して十分なものでなく，資料5にみるように，藁蒲団が冬に備えて準備されていたようです．また，この資料とほぼ同じ時期と考えられますが，昭和9年の岩手県二戸郡田山村の『生活状態調査書』の中の寝具の調査である「蒲団使用種類別戸数表」を資料6にしめしました．この村は，「鐵道の沿線でありながら」[17] 昭和初期において綿の蒲団のみを使用している家庭は145軒中10軒しかありません．これは，綿の蒲団が高価で手に入れにくいということもあったでしょうけれども，藁蒲団が寝床として快適なものであったからではないでしょうか．

夜具を床上に敷いて用いるという方法より古くからあるのが，先に述べた島根県の海村のように「家々では特定の寝室があってその室の閾が二寸五分高く室内にはばら〳〵の藁をしいてそのうえに蓙を敷いて」[18] やすむという方法でした．

藁を室内に敷き詰める寝床について，柳田國男は，「ちょうど苅り入れた新藁を乾してよくすぐり，それを一ぱいに敷きつめて，夜の床は香わしくなる．その下には二尺三尺の深さまで，籾殻を積んであるのが，普通であったが，これも年ごとに古いものと入れ替えたのである．‥（中略）‥ここのしきりだけには始めから戸があって，下の框が五六寸も高くなっていたものが多い．跨いで入るのは侵入者を食い止める方便でもあれば，同時にまた中から藁の飛び出さぬ



資料7　箱床（積水ハウス総合住宅研究所蔵，撮影　木谷）



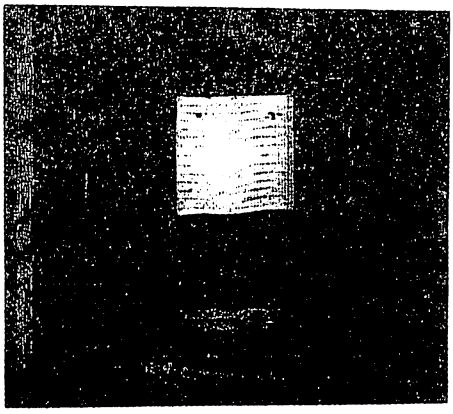
資料8　箱床に寝ている図
（宮崎 清『ものと人間の文化史 藁（わら）Ⅱ』法政大学出版局P.211より）

用意でもあった.」[19] と述べています．室内に敷きつめたのは，籾殻だけでなく，そば殻，ひえ殻などの地方もあった[20] ようです．

寝床に藁を用いる方法として，また別の方法がありました．資料7，8のような箱床（はこどこ）と呼ばれるもので，福島県南会津地方や長野県北信地方で使われていたそうです．広さ畳1畳，深さ30cmの大きさの箱を板で作り，中に藁を敷きつめた寝床です．冬の寒さが厳しい地方では，このような寝床が準備され，冷たい隙間風を防ぎ，壁からの冷輻射をさえぎり，狭い空間でも暖かく休める工夫がされていたのでした．

資料9，10は信濃秋山郷の民家の「へや」入り口と入り口からのぞいた内部です．まわりを壁で囲まれ，入り口は小さく，薄暗い室内の様子が伺えます．開口部が非常に少なく閉鎖的な空間で，入り口の敷居を約50cmくらい高くして中の藁が飛び出すのを防いでいます．

高い框と板壁で間仕切りされ，入り口の高い敷居にたてられた板戸には，内側に「くるる（枢）」とよぶ「落し猿」がつけられ，戸を閉めると自動的に施錠され，外からは鍵がないと開けられないような構造[21] をもつ寝室を，「帳台構え」とか「納戸構え」といいます．そして，入り口の高い敷居を「恥隠し」と呼ぶ地方があります．「或貧家の少年，寝藁々々とよく謂ふので，見得坊の父



資料9　旧山田家「へや」入り口
（宮沢智士編『日本の民家，第2巻農家Ⅱ』学習研究社 カラーグラビア73より）



資料10　旧山田家「へや」内部
（服部緑地 日本民家集落博物館，撮影　木谷）

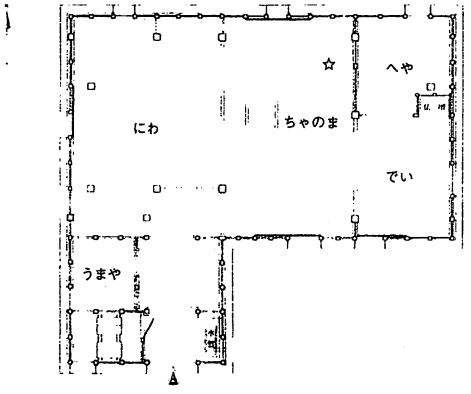
が之を戒め，人の聞く前では必ず蒲團と謂へと教へて置くと，チャンよ，こなたの脊中に蒲團が一筋くつついて居るは，と云つた」[22] という話が伝えられており，藁の寝床は恥ずかしいものと考えられるようになっていきました．しかしながら木綿の薄団を使う家が増えるに従い，「板敷の上では寝にくいと謂って，藁の上に生涯を完了した老人」[23] がいたように好んで藁の寝床にねていた人も少なくありませんでした．

4．万年床

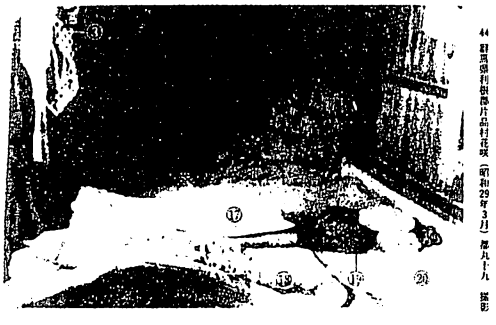
住まいの構造は従来のままで，次第に綿の蒲団が各家庭に普及していくのですが，湿気を防ぐという特質[24] をもつ藁とは異なり，湿気を帯びやすいという綿の性質が思わぬ問題を引き起

こすことになります．

藁の寝床であった時代には，夜には藁にもぐりこみ朝になったらそこから出ていくという生活の仕方で，寝室の管理というのは新しい藁に入れ替えるときくらいでしたが，そのやり方が綿の蒲団を使うようになってからもそのまま引き継がれたのが万年床です．先に述べたように，民家の寝室は閉鎖的で，通風・採光が悪く，その中に綿の蒲団が敷きっぱなしにされている状態（資料12参照）は，非常に不衛生で，昭和10年代後半の同潤会による「東北地方漁村住宅改善要旨」[25]にみられるように，「東北地方の寝間は欠点中の欠点である．光線も通風もない閉ぢ込めた狭い室に寝ることは，衛生上非常によくないが，殊に万年床は最も非衛生的である．」と指摘されることになります．具体的な改善策として，「明るい大きい窓をつける，日中は風を通す，夜具は毎日片付ける，天井をつける」など７項目があげられていました．しかし，昭和27年の秋田県の調査では51％の農家が万年床のナンドであったということです[26]．



資料11　旧山田家　平面図（資料９と同じ，P.171）
資料10は平面図☆印より，へや内部を写した．



資料12　万年床
（『写真でみる日本生活図引④すまう』弘文堂P.47より）

5．おわりに

現在のようなさまざまな住宅設備がない時代においては，採暖のために狭い密閉された空間に集まって寝るという方法をとらざるをえなかったのでしょう．

以上，いくつかの例をみてきましたが，木綿の暖かい蒲団が普及する前にはそれぞれの地方で，寒さに対して少しでも暖かく快適に眠れるように，寝床や住空間に工夫がこらされていたといえます．

引用文献

1）小泉和子；『家具と室内意匠の文化史』，法政大学出版局，P.239 (1979)
2）宮本常一；「民衆生活様式の変遷」『宮本常一著作集26』，p.318～319 (1981)
3）瀬川清子；「寝具と寝室」『国文学　解釈と鑑賞』，16-8，p.79（1951年8月）
4）西山卯三；『日本のすまいⅠ』，勁草書房，p.140 (1975)
5）日本建築学会民家語彙収録部会編；『日本民家語彙集解』日外アソシエーツ (1985)
6）前掲書５）P.568～9 参照．
7）柳田國男；『居住習俗語彙』，国書刊行会，P.139～140 (1975)
8）前掲書５）P.56
9）日本風俗史学会編；『日本風俗史事典』，弘文堂，p.474 (1979)
10）『日本国語大辞典』，小学館，P.522 (1989)
11）表現研究所編；『日本の民家』，小学館，p.18 (1985)
12）鈴木牧之選編，岡田武松校訂；『北越雪譜』，岩波書店，P.103 (1982)
13）瀬川清子；『女のはたらき』，未来社，P.223 (1962)
14）早川孝太郎；「夜衾のこと」『旅と伝説』，3-12，p.88 (1930)
15）柳田國男；『新編柳田國男集４』筑摩書房，p.90 (1978)
16）宮本常一，前掲書２），p.320
17）瀬川清子；「藁のふとん」『民間傳承』，第５巻第４号，p.37（1940年１月）
18）瀬川清子前掲書３），p.78
19）柳田國男前掲書15），p.90
20）饗庭斜丘；「蒲團講」『旅と伝説』，13-12，p.11 (1940)
ここでは，そば殻の中で寝ている様子を「現在の百姓家では，良いなり悪いなり綿の入った蒲團をもたぬ家は，殆ど無いと云つても良い．ところが三四十年以前までは，そんな蒲團を持たぬ家の方が大部分であった．明治中期までは，現在は高山市に編入されてゐる七日町の百姓家でさへ，一二の例外をのぞいては，全部床無しの土座の家だったと云つてゐる．土座の家に住んで居るものは，蒲團を殆ど使はない．藁か，稗ガラか，又は蕎麥ガラのなかへモグリ込で寝るのである．或人が阿多野方面で夜遊びに忍込んだら，歩くたびにごそ〳〵と鳴って落こむだけでなく，肝腎の女の姿が見つからなかった．よく見たらスッポリ蕎麥ガラの

中に落こんだ様になって，眠ってゐたと笑って話してゐた．また老人連中が素裸で寝るのは此の中だと云ふ事である云々（ひだびと七ノ一）」と述べている．
21）高取正男；『高取正男著作集Ⅳ　生活学のすすめ』法蔵館，P.11 (1982)
22）柳田國男；『定本柳田國男集２』筑摩書房，p.36～37 (1970)
23）柳田國男；『定本柳田國男集14』筑摩書房，p.486～487 (1969)
24）宮崎　清；『ものと人間の文化史　藁（わら）Ⅱ』，法政大学出版局，P.212 (1985)
25）「東北地方漁村住宅改善要旨」『近代庶民生活誌⑥食・住』三一書房，P.444 (1987)
26）西山夘三；『日本のすまいⅢ』勁草書房，P.51 (1980)

☆　　☆



町田玲子

1967年奈良女子大学大学院家政学研究科住環境学専攻修了．奈良女子大学家政学部住居学科非常勤講師を経て，1970年より京都府立大学家政学部勤務．現在同大学生活科学部助教授．学術博士．専門は住居学，家庭管理学．
主な著書；「これからの家庭経営学」（共著，建帛社），「いま家事労働に問われるもの」（共著，有斐閣），「住生活と住教育」（共著，彰国社）ほか．



木谷康子

1982年京都教育大学教育学部家政学科卒業．1984年奈良女子大学大学院家政学研究科住環境学専攻修了．滋賀女子短期大学，大阪薫英女子短期大学等の非常勤講師を経て，1994年より滋賀女子短期大学生活学科講師．専門は住居学，家庭科教育．
主な著書；「住生活と住教育」（共著，彰国社）